

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

1. 活動のテーマ

<テーマ>

「卓球」の探究活動から本気のオリンピックごっこ開催へ

<テーマの設定理由>

(テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など)

卓球の時間では体を動かして打ち方やボールの弾み等工夫をしながら楽しむ活動を行っている。単に卓球の上達を目指しているものではなく、体を動かす喜びや体重移動等様々な動きを楽しみながら身に付けることを目指している。子ども達と「卓球」をテーマに探究活動をしていく中で、系列園で「オリンピック」に興味を持っている様子が見られるとの連絡を受けたので、園内で子どもたちに話をしてみるとパリオリンピックを見ていた子も多く「1位、金メダルはすごい」「開会式がかっこいい」「メダルがかっこいい」等の話が出た。系列園と情報共有を重ねていくと、実際に「オリンピックごっこ」をやってみたいという子どもたちの声のでてきたのを受けて、「オリンピックごっこ」を開催することにした。

2. 活動スケジュール

急遽大会開催が決まったことや既に決まっている行事等との調整から、1月後半の大会となった。大会のルールは、子どもの卓球の習熟度を勘案し、保育士が意見交換を行って決めたものの、限られた準備期間の中であっても、子供たちがイメージするオリンピックを実現するため、大会に向けた卓球の練習と並行しつつ、例えば、保育士から子ども達に対して、オリンピックで印象に残っていることを聞いたうえで、どのようなことを行いたいのか、オリンピックが分からない子どもに対しては、運動会で楽しかったことやどういう応援をされたとき力が出たか等、園児それぞれの意見を聞いた。そのうえで、それを形にするためにはどうするとよいかなどの問いかけを行い、自分たちがどうしたいか、どうしたらよいかを考えさせ、表現させることを心掛け、これを基にして、近隣園同士や本社とも共有して、オリンピックの形を作っていくこととした。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具)

「オリンピック」はあくまで結果と捉え、そこに至るまでの過程に主体的な関わりを大切にするように心掛け、そのような取組となるように腐心した。すなわち、年齢により保育士の関わり(仲立ち)の度合いを加減したり、同じクラスの園児の意見交換の場では、保育士が状況に応じた臨機応変な司会を行う等、年齢、クラスのほか子どもたちの様子を見ながら、関わりのあり方を変えていった。オリンピックごっこができる会場を用意する。卓球用具を用意する。大会で使用するユニフォームは自分たちでデザインを決める、旗は自作する、メダル、トロフィーの用意。観客を招待する招待状の用意。記録用ビデオカメラ、動画編集意見交換用パソコン、動画再生用プロジェクター、スクリーンの購入。大会会場への移動手段の手配。日々の探究活動と同時に大会へ向けた活動の指導者の手配。大会会場へ機材搬入者の手配。不審者対策を考える。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

オリンピックは世界大会なので参加者は系列園全園から代表者が集まるようにした(知らない子がいる=多国籍)。準備期間においては、大会に向けた卓球の練習(狙った的に打球を打返す)のほか、「オリンピック」らしくするための演出について意見(「メダル」、「表彰式」、「開会式」、「応援」等)を出し合い、これに基づき、カッコよく応援するための応援の練習をしたり、選手宣誓の練習を行なう等、自分たちの意見を形にするような取組をおこなった。

「オリンピック」においては、緊張のためか、卓球については日頃の練習の成果が出せなかった子どももいたが、自分たちが考えた応援や、自分たちがデザインを考えたユニフォーム(T シャツ)を着て競技や行進をすることにより、自分たちがイメージしたオリンピックを実行することができた。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

(活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等)

応援の旗作りでは、子どもたちにはオリンピックの入場シーンをイメージできる声掛けをしたため、思い思いに楽しんで作成をした。

試合には一人で卓球台の前に立ち、出てくる球を的に当てる努力をした。保育者の声掛けから、その姿を仲間で一生懸命応援をした。「オリンピック(ごっこ)を行なう！」という一つの目標に向かって、それぞれが主体的に考え、拙いながらも自分の意見を述べたり、友達の意見を聞いて賛同する姿が見受けられた。2歳児クラスのため、保育士の関与は多めではあったものの、自分の思ったことや考えたことを皆の前で発言する経験はあまりなかったため、今回は良い機会になったと考える。

5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

- 1 保育士が適切に仲立ちすることによって、自分だけでなく自分「達」がこうしたいと考えていくことが可能であるとの気づきがあった。
- 2 主体的に考えたことに対しては、そこを起点としてさらに展開をさせていくことができることに気づきがあった。
- 3 小規模園にとっては、他の多数の園児と触れ合う機会が少ないため、系列園の同年代の子どもたちと触れ合う機会を手始めとして、会話ができるような関係に進め、次回再び卓球を素材とした大会を行なう機会があるのであれば、今回園で行った意見交換会を他の園も含めて行なうことができれば、子どもたちの視野を広げることができると思う。